



経営学部長

関根 純

教授

「想定外」に
強くなれ

せきね じゅん

1958年東京生まれ。東京大学工学部計数工学科卒業後、同大学院修士課程修了。博士（工学）。NTT 情報流通プラットフォーム研究所、NTT データ 技術開発本部を経て、2010年に経営学部に入職。趣味は、バドミントンとジムで体を動かすこと。

28年間の会社生活を経て大学に移り10年目を迎えた。その中で、個々の教養科目、専門科目とは別に学生時代に学んでおいてほしいと思ったことを、自らの経験を踏まえて述べたい。

変化が大きかった小中学校時代

中学卒業までは、およそ普通の生徒が経験しないことを多く経験した。まず、親の仕事の関係で幼稚園から小学校1年生までイギリスのロンドンに滞在した。それも大変だったが、帰ってから大いにカルチャーショックを受けた。勉強は2年生まではついて行けず、生活にも馴染めなかった。例えば、食パン中心の給食が嫌いだったが、残すと怒られるので、何故か後ろの女の子の足元に投げ捨てたものだから、その子に告げ口されひどく怒られた。「あなた何故それで済むと思ったの」と、今でも妻に笑わ

れる。ようやく慣れた5年生の初めに、今度はベルギーに転勤になった。現地校に入学し、フランス語で苦勞した。家族に聞こうにも、母親のフランス語は自分と大差なく、父親はしつこく聞くと癪癪をおこす始末だった。特に、数ヶ月に1回の工場見学の後に待っている20頁ほどのレポートが苦痛だった。さらに6年生の終わりにはイランへの転勤が決まった。言葉で苦勞するのはもう嫌だと親にごねたところ日本に帰され、半年間は母親がいたものの、男子だけの寮がある中学で過ごした。

ここはまさに軍隊だった。男子70人が大部屋の寝室で朝6時に起床し、1分で着替えて外に出て、近くの丘まで走り讃美歌を歌う。その後、部屋やトイレを掃除し、食事は15分間。夕方は6時から食事で、7時から2時間の勉強。その合間に入浴と洗濯。冬でもほぼシャワーだけで、洗濯機は足りず手洗いだった。9時半にはベッドで歌をうたい45分

に消灯。休日もスポーツ大会など、何もない日はなかった。持ち物を置けるのは、よくある30センチ幅のロッカーと勉強机だけ。学外に外出・外泊できるのは、ひと月に1回程度。テレビや新聞を見る時間はなく、世の中のことは何も知らなかった。

そんな中、寮生の中に付属の高校に行かず他校を受験する先輩が数人いることに気づいた。自分も外に出たいと親に手紙を書き送ったところ、母親だけ3年生の夏に帰ってきた。初めての通学生活だったが、ほどなく学校から、登校せず自宅で勉強していると言われて退路を断たれた。10冊以上の参考書を机の上に山積みして朝から晩まで勉強したのを覚えている。

近所の都立高校にめでたく入学して皆と同じ生活になった時、何て生きるのが楽なんだと思った。普通に学校で勉強し、友達としゃべりながら帰宅する。掃除や洗濯はない。大学受験ですら、高校受験の悲壮感はなかった。

大学、大学院ではのほほんとしていた。成績は悪くなかったが、無目的に生きていた気がする。プログラミングだけは三度の飯より好きだった。

鍛えられた会社時代

入社当初は、様々なデータを管理するソフトウェアの開発に従事し、その後はデータの管理に関する研究もやった。入社時に、その後の人生に影響を与える上司と出会った。厳しい人で、技術資料を作るにも、書き方が悪ければ何度でも書き直しをさせられる。30回くらい書き直したこともあった。まだワープロがない時代に20頁の技術資料をである。ここまで厳しく指導された同期はおらず、当時は納得できなかったが、そのお陰で、物事を論理的に整理する方法や文章を書く方法を身に付けた。それが今も役立っている。

長い会社生活の中で印象深いのは、30代後半に欧米の電話会社と組んだ巨大プロジェクトに参加し、イギリスのReadingに2年間、同僚2人と駐在したことだ。欧米流の会議の開き方、根回しの仕方、など学ぶことが多かった。そのプロジェクトで作った成果物を、メンテナンスのためより大きなIT関連の団体に渡す使命を与えられ、一人派遣され長い交

渉の末うまくいった時はうれしかった。丸2年かかった。それを阻止しようとする人たちに理屈で負けないよう、事前にあらゆる質問を想定し、一言われたら十言い返すくらい答えを用意する周到な仕事の仕方を上司から学んだ。

生活もスリリングだった。当時は、IRAのテロが盛んで、ロンドンとの行き帰りの電車の中で、テロの危険から電車が止まることはざらだった。同僚の家の前の信号機が爆破され、その音が自宅に轟いたこともあった。家庭でもいろいろなトラブルに見舞われた。ある時は、キッチンでボンと音がし電球が消えなくなった。恐る恐る電球を外すと、何故か10本以上の配線が中にあり、それが燃えてつながっていた。電子レンジが壊れたので修理に出したが、ひと月経っても直らなかった。結局ほとんどの電化製品が壊れた。会議後のパーティーを終えて自宅に戻ったら妻がレトルト食品の食中毒で倒れて動けなくなっていたこともあった。などなど、エピソードには事欠かず、想定外のトラブルには動じなくなった。それでも楽しい2年間だった。

その後は、企画の仕事を10年ほどし、会社の中核での仕事の仕方を覚えた。

前向きで動じない心

ここで述べたのと同じような経験を今の学生に期待することは難しいし、就職してから経験すればいいこともあろう。その中で、学生時代に何を学んでほしいかだが、論理的に物事を整理する方法等については、すでに世の中で言われており大学で教えている。それに加え、自ら考えて主体的に行動したり、どんどん変わる想定外の状況に忍耐をもって対応する経験をしてほしい。アルバイトでもいいし、大学にあっても、なるべくリアルな環境に身を置く経験ができれば、自分が主体的にやるしかない局面も出てくるし、想定外の状況変化やトラブルにも遭遇するだろう。経営学部であれば、リアルな環境あるいはそれを模した環境でのチーム活動を、ビジネス研究、リーダシップ開発プログラム、あるいはゼミナールなどの演習科目において提供しているので、是非履修し、前向きで動じない心を培ってほしいと願っている。